

表紙イラスト 野田 ともじ  
本誌イラスト 鈴木 千穂

## はじめに

「精神科診療室の中を覗いてみたい」と、学生時代の私は、はなは甚だ不謹慎な興味を抱きながら臨床実習に臨んだ。

外来を見学した時、初診で来た初老の女性の訴えは、胃痛など体の細々とした悩みだった。教授は、女性の反応を見ながら、日常生活や家族の事などを聞きつつ、徐々に核心に迫っていった。そして、ついに夫の退職金（ごく一部であったと記憶している）を投資に使って詐欺にあってしまった事を聞き出した。女性が「夫に申し訳なくて死にたい」とひとしきり泣いた後、教授は女性の気持ちを受け止め、そして「必ず家族は理解してくれる」と励まし、最後に薬を処方した。この間約一時間、入って来た時とはまるで別人のような

足取りで、女性は診療室を出て行った。私は教授に感心しつつ、だました相手を恨むのではなく自分を責め、挙句の果てには命に代えて責任を取ろうとする…その方の心の持ちように驚かされた。

病棟に行くと、患者さん同士の会話はごく普通で、流れている空気は至極日常的に見える。しかし、その中で数週間を過ごすうちに、少しずつ患者さんと自分の違いに気づいてきた。ある日のレクリエーションの時間、うつ病の中年女性が一心不乱にキャベツを刻んでいた。そして肝心のバーベキューが始まる頃になると、彼女は過剰なまでにきれいに刻まれた大量のキャベツを前に寝込んでしまった。その利他的な行動に舌を巻いた。私などは、バーベキューが始まるまでにどうやって腹をすかさうかなどと考えていたのに…。また、病棟の卓球チャンピオンとして鳴らしていた統合失調症の中年男性が、卓球部である事を黙っていた同級生に試合で負け、泣いてベッドから出て来られなくなった事もあった。子供の様に純粋な人だと驚かされた。泣かせた張本人は「社会には、もっと厳しい事がいっぱいある」などと言って開き直っていた。

あれから三十年、今も私は、素晴らしい感性を持った方々と日々接している。感動させていただき、発想を転換させていただき、エネルギーをいただき、助けていただき、人が生きるという事の意味や本当の価値とは何かを教えていただいている。

しかし、精神科診療室の中の事が世間ではあまりに誤解されていて、問題の一部分だけがクローズアップされているように思える。実際の精神科診療室の中では、ほとんどの患者さんと医師がお互いを尊敬し合い、良い関係を築いている。なのに、いまだに窓を閉じようとしているのは社会の方ではないだろうか。もっと精神科診療室の窓を開いて、患者さんの事を知ってもらえたらと思いい本書を書いた。

患者会に参加させていただくと、みなさん各々に辛い経験を持っている事がわかる。それは患者さんの感性に社会がついていけないだけのような気もするが、いずれにしても社会で少数派の患者さんたちは傷ついている。患者さんの辛さを伝える仕事もしなければならぬと思う。しかし敢えて今回は、そんな患者さんたちの病気とは関係のない、あるいは病気だからこそその「人間性の素晴らしさ」をお伝えしたいと思う。しかし、プライバシーの問題があるので、残念ながら事実をそのまま書く事はできない。そこで、私の

臨床経験を通して出会った患者さんの実話を切り取り、貼り合わせて架空の患者さんを作り上げる事にした。今回登場する人たちを通して、実際の患者さんが人間的に素晴らしいという事をお伝えできればと願っている。

もしこの本を、私と出会った患者さんが手にしてくれたなら、改めてお礼の言葉を述べたい。私はあなたと出会って本当に幸せでした。ありがとう。

二〇一三年五月吉日 熱海にて

鈴木 映二

# 目次

はじめに 3

カルテには書かないでくださいね 10

長く通院してください 21

煙たい患者 30

ブランド青年 38

飛び出してくる 49

美脚の看護学生 58

震える 67

この薬大丈夫ですか？ 73

グッチのネクタイですね 78

オンコール 88

触れない 93

捨てられない塩辛 98

バーバリーのコート 103